

3. モデルニテをめぐって：印象派からポスト印象派、ナビ派へ

19世紀後半、古典主義的な手法やアカデミズムに異を唱える「印象派」が登場します。彼らは、現実の瞬間の風景を主題とし、それを芸術として取り上げることで永遠性をあたえようとする「モデルニテ（現代性）」という考えに沿って、科学的な色彩理論に基づいた手法で、同時代の都会の日常生活をテーマとしてとりあげました。また、写真や日本美術からも影響を受けています。「印象派」はその後ゴーギャンなどの「ポスト印象派」や、ドニなどの「ナビ派」、「シュルレアリスム」など新しい芸術運動の呼び水となりました。



カミーユ・ピサロ《オペラ座通り、テアトル・フランセ広場》1898年



アルフレッド・シスレー《カーディフの停泊地》1897年



ポール・ゴーギャン《バラと彫像》1898年



モーリス・ドニ《魅せられた人々》1907年

画像はすべて ランス美術館蔵 Reims, Musée des Beaux-Arts ©MBA Reims 2015/Christian Devleeschauer.

4. フジタ、ランスの特別コレクション (レオナルド・フジタ「平和の聖母礼拝堂」より)

本章では、20世紀初頭に世界各地から集まった若い画家を総称する「エコール・ド・パリ」を代表する画家レオナルド・フジタ（藤田嗣治 1886-1968）の晩年にスポットを当てます。日本に戻り、第二次大戦中に戦争記録画を描いたことで画壇から糾弾を受けたフジタは、1950年にフランスへ戻り、1955年にフランス国籍を取得、1959年にはランス大聖堂で、カトリックの洗礼を受けました。ランスには、フジタ晩年の代表作である「平和の聖母礼拝堂」があります。彼は、この礼拝堂の壁画を描くだけでなく、建物やステンドグラス、彫刻、庭などもデザインし、自らの画業の集大成としました。



平和の聖母礼拝堂（フジタ礼拝堂）/1966年建立 外観

美術館展

CHEFS-D'ŒUVRE DU
MUSEE DES BEAUX-ARTS DE
REIMS

2016

9/10 SAT. ▶ 10/30 SUN.

【休館日】毎週月曜日（ただし9月19日、10月10日は開館）、10月11日（火）

※9月20日（火）は臨時開館いたします。

【開館時間】10:00～19:00（展示室入場は閉館の30分前まで）

【観覧料】一般 1,200（1,000）円 / 大高生・70歳以上 800（600）円 / 中学生以下無料

※（ ）内は前売および当日に限り20名以上の団体料金 ※障害者手帳等をご持参の方および介助者原則1名は無料

【前売券】8月2日（火）から9月9日（金）まで販売：静岡市美術館、チケットぴあ【Pコード：767-707】、ローソンチケット【Lコード：41610】、セブンチケット【セブンコード：047-543】、各島屋興業町本店、各島屋マーズ静岡店、戸田書店静岡本店、戸田書店城北店、

江崎書店バルシェ店、MARUZENジュンク堂書店静岡店、中目黒新聞販売店（一部店舗除く）

【主催】静岡市、静岡市美術館 協定管理（公財）静岡市文化振興財団、テレビ静岡、中日新聞東海本社

【後援】静岡市教育委員会、静岡県教育委員会、在日フランス大使館、アンステチオ・フランス日本、静岡日仏協会、中日ジョッパー

【企画・監修】ランス美術館 【協力】AIRFRANCE エールフランス航空、ヤマトロジスティクス、G.H.マム 【静岡展特別協賛】株式会社安心堂

【企画協力】株式会社プレントラスト Exposition produite et gérée par le Musée des Beaux-Arts de la VILLE DE REIMS.

静岡市美術館

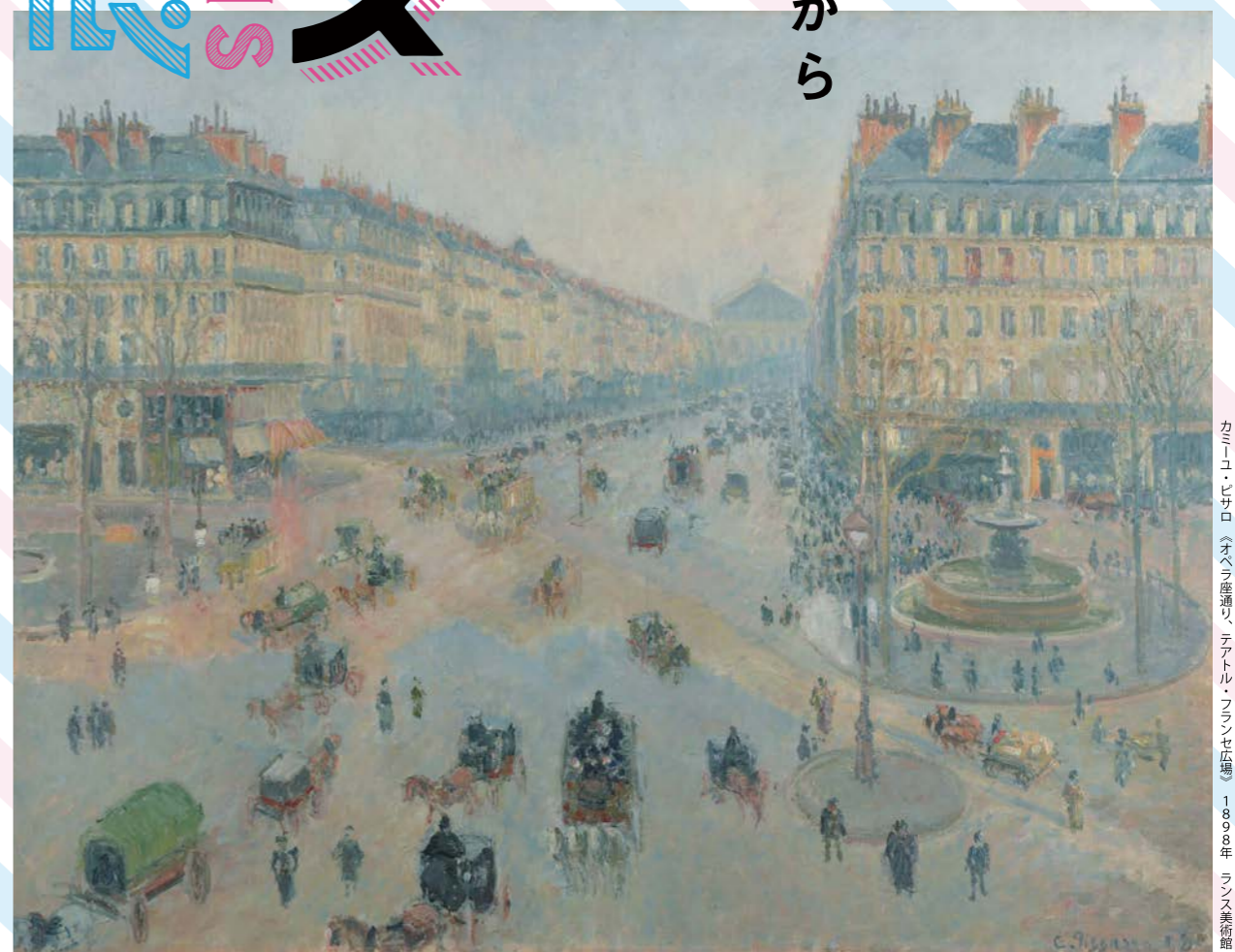
〒420-0852 静岡市葵区紺屋町17-1 葵タワー3F

Tel. 054-273-1515（代表） www.shizubi.jp

JR 静岡駅北口より徒歩3分

夜7時
まで開館

美しき
フランス
バロックから
フジタへ



カミーユ・ピサロ《オペラ座通り、テアトル・フランセ広場》1898年 ランス美術館蔵

【プレスリリースのお問い合わせ】 展覧会担当：小川・吉田 広報担当：大庭・青木

静岡市美術館

SHIZUOKA CITY MUSEUM of ART

〒420-0852 静岡市葵区紺屋町17-1 葵タワー3F info@shizubi.jp

Aoi Tower 3F, 17-1, Koyamachi, Aoi-ku, Shizuoka, 420-0852 JAPAN

tel. 054-273-1515（代表） fax. 054-273-1518 www.shizubi.jp

美術館展

CHEFS-D'ŒUVRE DU
MUSÉE DES BEAUX-ARTS DE
REIMS

美しきフランス バロックからフジタへ

フランスの古都ランスは、シャンパーニュ地方の街で、5世紀から歴代のフランス王が戴冠式を行った大聖堂のあることで知られています。発泡性ワインの「シャンパン(正式にはシャンパーニュ)」でも有名で、ランス美術館は、その「シャンパン」の生産で財を成した人々によるコレクションをもとに、1913年に開館しました。現在ではフランスの絵画や工芸を中心に、中世から現代に至る幅広い作品を有しています。この度、同美術館の大規模な改修に合わせ、そのコレクションの精華をご紹介できることとなりました。

本展では、ドラクロワ、ジェリコー、コロー、ミレー、ピサロ、シスレー、ゴーギャン、ドニをはじめとする17世紀から20世紀の巨匠たち、そして晩年この地で洗礼を受け、制作も行ったレオナルド・フジタ(藤田嗣治)など、特別出品を含む名画約70点を展示します。「美の街」ランスが誇る珠玉の作品の数々を、是非この機会にお楽しみください。

2016 9/10 SAT ▶ 10/30 SUN



【休館日】毎週月曜日(ただし9月19日、10月10日は開館)、10月11日(火) ※9月20日(火)は臨時開館いたします。

【開館時間】10:00~19:00(展示室入場は閉館の30分前まで)

【観覧料】一般 1,200(1,000)円 / 大高生・70歳以上 800(600)円 / 中学生以下無料

※()内は前売および当日に限り20名以上の団体料金 ※障害者手帳等をご持参の方および介助者原則1名は無料

【前売券】8月2日(火)から9月9日(金)まで販売: 静岡市美術館、チケットぴあ[Pコード:767-707]、ローソンチケット[Lコード:41610]、セブンチケット[セブンコード:047-543]、

谷島屋呉服町本店、谷島屋マークイズ静岡店、戸田書店静岡本店、戸田書店城北店、江崎書店ハルシェ店、MARUZENG ジュンク堂書店新静岡店、中日新聞販売店(一部店舗除く)

【主催】静岡市美術館 指定管理者(公財)静岡市文化振興財団、テレビ静岡、中日新聞東海本社 【後援】静岡市教育委員会、静岡県教育委員会、

在日フランス大使館/アンスティチュ・フランセ日本、静岡日仏協会、中日ショッパー 【企画・監修】ランス美術館 【協力】AIRFRANCE エールフランス航空、ヤマトロジスティクス、

G.H. マム 【静岡展特別協賛】株式会社安心堂 【企画協力】株式会社プレントラスト Exposition produite et gérée par le Musée des Beaux-Arts de la VILLE DE REIMS.

本展のポイント

- ランス美術館のコレクションを紹介する 日本では約10年ぶりの展覧会。
- ドラクロワ、コロー、ミレー、ピサロ、シスレー、ゴーギャンなど、17世紀から20世紀までの、日本初公開作品21点を含む名画約70点を一堂に展示。
- ランス大聖堂で洗礼を受けるなど、ランスと縁の深いレオナルド・フジタ(藤田嗣治)の作品も多数紹介。近年寄贈された作品のほか、代表作「フジタ礼拝堂」のフレスコ画の貴重な下絵10点も公開。日本国内からの特別出品とともに、晩年のフジタの創作活動に迫ります。

1. 国王たちの時代: バロック・ロココ

17・18世紀には、人物の激しい動作・表情や明暗法を用いた「バロック」様式や華奢で複雑な曲線や優美な色彩を特徴とする「ロココ」様式が流行。王侯貴族の肖像画や、絵画のヒエラルキーで最上位とされた宗教画や歴史画が多く制作されました。また風景画では、現実に存在しない理想的な風景が描かれました。



マールテン・ブーレマ・デ・ストンメ
(レモンのある静物) 17世紀



ヤコブ・ヨルダインス(と思われる)
(サテュロス) 17世紀



リエールイ・ペラン・II サルブル
(ソフィー夫人(またはの名を小さな王妃)の肖像)
1776年

2. 近代の幕開けを告げる革命の中から : 新古典主義・ロマン主義・バルビゾン派

1789年の「フランス革命」によりブルジョワ層が台頭すると、彼らがむテーマ・手法や個人の価値観に基づいた作品が増えていきます。道徳的なテーマを、古代ギリシャ・ローマの影響を受け、厳格で簡素な手法で描く「新古典主義」や、歴史的事実を個人の感情や価値観で描く「ロマン主義」が登場しました。風景画でも変革が起こり、戸外でのスケッチに基づき、現実の風景を主題に描く「バルビゾン派」が登場し、「印象派」など新たな芸術運動へとつながっていきます。



ジャック・ルイ・ダヴィッド(および工房)
(マラーの死) 1793年7月13日以降



ウジェーヌ・ドラクロワ
(「ポロニウスの亡骸を前にするハムレット」)
1854年から1856年の間



カミーユ・コロー(川辺の木陰で読む女)
1865年から1870年の間



エドゥアール・デュブッフ(ルイ・ボメリー夫人)
1875年